

「イエシュアの十字架（2）」

マルコの福音書 15:21

はじめに

「十字架」を意味するヘブル語、ツェラーヴ(צֶלָב)というこの言葉は、実は旧約聖書には一切使用されていません。しかしユダヤ人たちは確かにこの言葉を用いて、イエシュアを「十字架につける」と言っています。つまりツェラーヴは、ヘブル語でありながら旧約聖書のみを聖典とするユダヤ人たちには、その意味が隠された言葉だということです。しかしそれは形を変え、また二つに分けられ、「影、陰」を意味するツェール(צֶלַל)、「心」を意味するレーヴ(לֵב)として旧約聖書に用いられています。ではそれぞれの最初の言及から、その本来の意味するところを見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

19:1 その二人の御使いは、夕暮れにゾドムに着いた。ロトはゾドムの門のところに座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって彼らを迎え、顔を地に付けて伏し拝んだ。

19:3 …ロトがしきりに勧めたので、彼らは彼のところに立ち寄り、家の中に入った。

19:8 …あの人たちは、私の屋根の下に身を寄せた…。

創世記【新改訳 2017】

6:5 【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。

6:8 しかし、ノアは【主】の心になっていた。

天からの火と硫黄によって滅ぼされた町ゾドム、そしてノアの大洪水によって滅ぼされたかつての地上、これら二つの記述はどちらも、人の悪、その罪の大きさのゆえに神がこれを滅ぼされたということが記されています。しかしロトやノアのように、その滅びから救い出される者の存在も指し示しています。ロトは二人の御使いによって、ノアは箱舟によってそれぞれ家族とともに救い出されました。このように、神による滅びと救いという、同様のメッセージ、神のご計画がツェールとレーヴ、すなわちツェラーヴ、ヘブル語の十字架という言葉には二度繰り返され強調される形で表されているのです。そしてそれは過去を思い起こすためのものではなく、世の終わりに起こる未来の出来事、最終的な神のご計画を表すものとして受け止めなければなりません。まさにこう記されているとおりです。

マタイの福音書【新改訳 2017】

24:35 天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。

やがてこの世界は消え去る、滅び去るのです。そしてそれは決して消え去る、変わることはない御言葉のとおり、そのままに成就、実現します。すなわち神による滅びと、そしてそこからの神による救いです。このように聖書とは、過去や今を思うためのものではなく、過去の事実に表された、やがて神がなそうとしておられる未来の事実を見つめて今を生きるためのものです。それは明確なゴールを見定めて、確かな

足取りで今を生きるために必要不可欠な理解、情報であり、神に対する信仰を大いに励ますものです。では今日もそのような視点で御言葉を捉えてまいりましょう。

1. アレクサンドロとルフォス

マルコの福音書【新改訳 2017】

15:21 兵士たちは、通りかかったクレネ人シモンという人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。彼はアレクサンドロとルフォスの父で、田舎から来ていた。

偶然を装う形で、何の脈絡もなく登場する「クレネ人シモン」。しかもその紹介は、通常「○○の子」と表されることが多いのですが、彼は「アレクサンドロとルフォスの父」とあり異例です。これはこのマルコの福音書が宛てられた最初の読み手たちが、彼の子たちである「アレクサンドロとルフォス」をよく知る者たちであったため、という解釈が一般的ですが、これをヘブル語の視点で捉えてみますと、ここにも神のご計画を見出すことができます。

まず「アレクサンドロ(אֱלֵכְסַנְדְּרוֹ)」について。彼の名は世界史にも謳われるギリシャの大英雄の名そのものですが、これをあえてヘブル語で表記するとこのようになり、するとそこには「神」を意味するエール(אֵל)、**「御座、王座」**を意味するケース(בַּיִת)、そして**「誓願を立てる」**という意味のナーダル(נָדַר)という三つの言葉を見つけることができます。そしてこのナーダルの最初の言及を見てみますと、そこには「神」がその「御座」を設けられる、すなわち神がそこにおられる、住まわれる「神の家」神の国が指し示されているのです。

創世記【新改訳 2017】

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

28:16 ヤコブは眠りから覚めて、言った。「まことに【主】はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」

28:17 彼は恐れて言った。「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。」

28:18 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

28:19 そしてその場所の名をベテルと呼んだ。その町の名は、もともとはルズであった。

28:20 ヤコブは誓願を立てた。「神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、

28:21 無事に父の家に帰らせてくださるなら、【主】は私の神となり、

28:22 石の柱として立てたこの石は神の家となります。私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」

神はこのようにアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルにご自身の計画を語られ、そしてヤコブはそこに神とイスラエルの子孫、民によるベテルすなわち「神の家」を宣言し、ナーダル「誓願を立てた」とあります。そしてその条件は「神が私とともにおられて…無事に父の家に帰らせてくださるなら」となっており、これは単なる自分の実家のことではなく、「エルサレムの神殿」を指して預言しているのです（ルカ 2:49、ヨハネ 2:16）。今日、国家としてのイスラエルが再建され、続々とユダヤ人たちが帰還を果たしていますが、未だエルサレムに神殿は再建されていません。そのために必要なもう一つの存在、正確には二つの存在が、次の「ルフォス(רופוס)」の名には表されています。このヘブル語表記には「踏みつける」という意味のラーファス(רפאס)が見出せます。

詩篇【新改訳 2017】

68:28 あなたの神はあなたの力を現れさせました。神よあなたが私たちに示された力を。

68:29 エルサレムにあるあなたの宮のゆえに王たちはあなたに献上品を携えて来ます。

68:30 羣の中の獣を叱ってください。国々の民の子牛を連れた雄牛の群れを。彼らは銀の品々を踏みつけています。戦いを喜ぶ国々の民を散らしてください。

「エルサレムにあるあなたの宮」をラーファス「踏みつけ」る「獣」と、それを「叱って」「散ら」す「神」。この歌はまさに終末に現れる獣、反キリストと、それを打ち滅ぼすために再臨されるメシア、イエシュアを表しています。このように「アレクサンドロとルフォス」という、今日の私たちには一見何の意味も関わりもないような存在の中にも、神のご計画は、実に鮮やかに、見事に表されているのです。

2. クレネ人シモン

そして彼らの父である「クレネ人シモン」について。「シモン(שמון)」という名については前回もお伝えした通り、神の御声を「聞く」という意味のシャーマ(שמע)がその語源、由来ですが、それは本来、言葉や話を聞くというよりも、集まるための合図、号令を聞くという意味の言葉です。

創世記【新改訳 2017】

3:8 そよ風の吹くころ、彼らは、神である【主】が園を歩き回られる音を聞いた。それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて、園の木の間に身を隠した。

3:9 神である【主】は、人に呼びかけ、彼に言われた。「あなたはどこにいるのか。」

このように、本来のシャーマ「聞いた」は、離れた場所にいる人に向けて、神が発せられた「音」声を聞くことにあり、それを聞いた人が神のみもとに集まる、集められるという目的を持っていました。最初の人アダムはこれを聞いて隠れてしまいましたが、この「クレネ人シモン」には、無理やり、強制的に集められる者の存在が表されています。なぜなら彼の出身地クレネ、「クレネ人(קרני)」というこの名には

「角」という意味のケレン(קֶרֶן)という言葉を見ることができ、その本来の意味は「藪にその角が引っ掛かり、捕らえられた雄羊」、「全焼のささげ物としての雄羊」を表しているからです。

創世記【新改訳 2017】

22:13 アブラハムが目を上げて見ると、見よ、一匹の雄羊が角を藪に引っかけていた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の息子の代わりに、全焼のささげ物として献げた。

アブラハムの息子イサクの身代わりとして捕らえられ、そして献げられた「角」の「雄羊」。これは十字架のイエシュアを表しているという解釈が一般的ですが、ヘブル語の視点では、その十字架の死から復活されたイエシュアが天に上られたという事実と、そしてさらにそれを「型」とする、教会をはじめとするイエシュアを信じる者たちの携挙、イエシュアの空中再臨の事実を指し示すものであるとも言えます。なぜなら「全焼のささげ物」という意味のオーラー(עֹלָה)、そしてその語源でもある「献げ(る)」という意味のアーラー(עָלָה)には本来、焼く、殺す、死ぬというような意味合いはなく、それは蒸気や煙のように「湧き上がる、立ち上る」という意味を持った言葉だからです(創世記 2:6)。

イエシュアは現在、文字通りの天にアーラーすなわち上られ、そこにおられます。その目的は以下のとおりです。

ヨハネの福音書【新改訳 2017】

14:2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意に行く、と言ったでしょうか。

14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

このようにイエシュアが天にアーラー、上られたその目的と、私たち教会が携挙される目的とは上記にある同じ神のご計画を指し示すのです。携挙の際、御使いたちのかしらであるイエシュアの号令と神のラッパすなわち「角」笛の音を私たちはシャーマ、聞くこととなります(Iテサロニケ 4:16、17)。「クレネ人シモン」という名にはその事実が表されているのです。そしてその様は、私たちの意思や力を一切必要としない、神の側からの一方的な、大胆かつ強引な、まさに「無理やり」と言うべき神のご計画です。

3. 無理やり

ローマ兵たちはシモンに十字架を「無理やり」背負させたとあります。ここには「強要する」という意味のアーナス(אָנָס)が使われており、その最初の言及は以下の箇所です。

ダニエル書【新改訳 2017】

4:8 最後にダニエルが私の前に来た。彼の名は私の神の名にちなんでベルテシャツアルと呼ばれ、彼には聖なる神の霊があった。私はその夢を彼に話した。

4:9 「呪法師の長ベルテシャツアルよ、私は、聖なる神の霊がおまえにあり、どんな秘密もおまえには難しくないことを知っている。私の見た夢の幻はこうだ。その意味を言ってもらいたい。

これはバビロンの王ネブカドネツアルが見た夢を預言者ダニエルが解き明かしたという時のものですが、神の霊によってでなければ解き明かすことが「**難し**」い、無理難題な夢、幻を指す言葉としてアーナスが使われています。そしてその夢とは、これから後に起こる数々の出来事、神のご計画を表していました。つまり「**クレネ人シモン**」に「**無理やり**」十字架が背負わされたというこの出来事には、イエシュアを信じる教会に、神の秘密、神の奥義としての、これから後に起こる神のご計画についての解き明かし、啓示が託されたということが表されているのです。それはまさに今こうして私がみなさんにお伝えしているように、聖書の御言葉の中に、記述された出来事の中に秘められた神のご計画を聞く、知る、信じる、そして宣べ伝える、教える会、まさに教会として私たちが建て上げられることを表しているのです。

このように、無理やり十字架を背負わされたクレネ人シモン、彼の存在の中には十字架、ツェラーヴに表された「滅びと救い」という神のご計画を聖書から解き明かす教会の存在が啓示されているのです。そしてその神のご計画とは、イスラエルの民とエルサレムの神殿と密接なつながりを持っているということが、アレクサンドロとルフォスという彼の息子たちの中に表されているということをぜひ覚えてください。

4. 耕し守る

今日の聖書解釈もまた、短いながらもかなり難しいものであったかと思います。このようなメッセージをすると多くの方が言います。「そんなにこねくり回さなくても、もっと普通に読めばいいじゃないか」と。実はたまに私もそう思います。ではそう思われる方々に聞きたい。聖書のどこに「聖書は普通に、そのまま読めばいい」というようなことを教えている箇所があるのでしょうか。逆に聖書はこう言っています。御言葉のその意味は、「隠されている」と。

マタイの福音書【新改訳 2017】

13:35 それは、預言者を通して語られたことが、成就するためであった。「私は口を開いて、たとえ話を、世界の基が据えられたときから**隠されている**ことを語ろう。」

ルカの福音書【新改訳 2017】

9:45 しかし、弟子たちには、このことばが理解できなかった。彼らには分からないように、彼らから**隠されていた**のであった。

18:34 弟子たちには、これらのことが何一つ分からなかった。彼らにはこのことばが**隠されていて**、話されたことが理解できなかった。

土の中に埋まっている宝を掘り起こすこともせずに、普通にその上に立っていて、どうしてそれを見出すことができるでしょうか。実に神は人を「耕し、守る」者としてお造りになられたのです（創世記 2:15）。私はこの訳は素晴らしい訳だと思っています。なぜなら「耕す」とは土を掘り起こし、掘り返し、その中にあるものを露わにするような作業を指すからです。私たちは聖書という名の土地を、神からいただいた聖霊という鋤や鋤を使って掘り起こし、まさにこれを「耕す」者なのです。そして見出した宝である御言葉のその意味、すなわち神のご計画を忘れないように、誰にも奪われないように「守る」者なのです。ですからこれからも聖霊に導かれつつ、そのような者として歩んでまいりたいと思います。